

東北・越後方言における /r/ をめぐる音変化

齋藤孝滋

キーワード・比較・/r/ 行拍連続回避・/r/ 行拍の ϕ 化・/r/ 行拍の Q 化・/d/ の /z/ 化

0. はじめに

本稿では、中央語には生じなかった東北・越後方言における活用語の「/r/ 行拍回避」の現象 — 具体的には、活用語語幹における(1)「/r/ 脱落」(na ϕ a \bar{r} eru/ 流れる)、(2)「/r/ 行拍の /Q/ 化」(na ϕ aQru/ 流れる) — , 及び、それとは正反対の方向性をもつ「/r/ 行拍増加」の現象 — 具体的には(3)「/d/ の /r/ 化」の3つの現象を対象として取り上げる。これらの現象についてのメカニズムレベルで論じた先行研究は、庄内方言の(1)「/r/ 脱落」について論じた井上(1981a, b)のみである⁽¹⁾。

図1・図2は、語幹における「/r/ 脱落」の分布および「/r/ 行拍の /Q/ 化」が確認された地点を「借りる」、「足りる」の地図によって示したものである⁽²⁾。

本稿は、図1, 2に示した地域の中から、これらの現象を見る上で重要と思われる東北・越後地方の8方言 — 北奥羽方言に属する青森・八戸(以上青森県)、秋田(秋田県)、安代・久慈(岩手県)の各方言、南奥羽方言に属する一関(岩手県)・仙台(宮城県)の各方言、越後方言に属する三条(新潟県)方言 — を取り上げ、その記述資料⁽³⁾を個々に或いは対照しながら検討することにより、各々の現象について、その発生と進行のメカニズムを明らかにすることを目的とする。

1. 語幹における「/r/ 行拍」の回避

表1は、8方言及び方言集『弘前語彙』(松本明1954)⁽⁴⁾の何れかにおいて、語幹における「/r/ 脱落」または「/r/ 行拍の /Q/ 化」現象がみられた語について、

図1 「借りる」

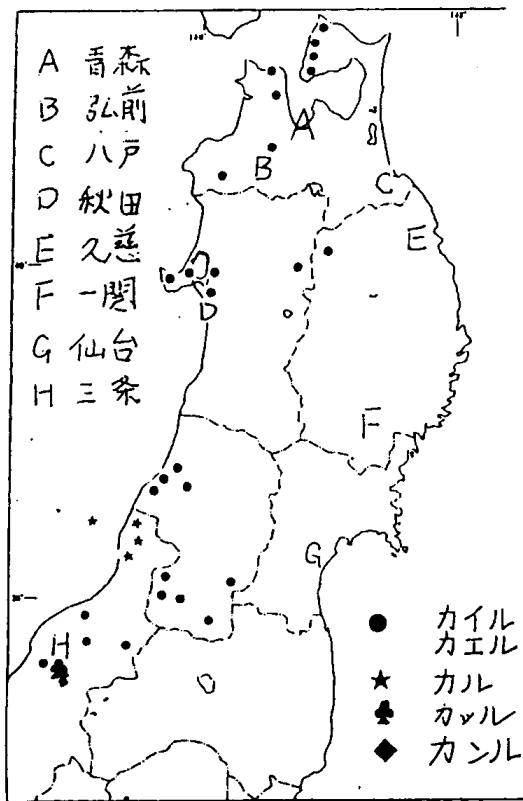
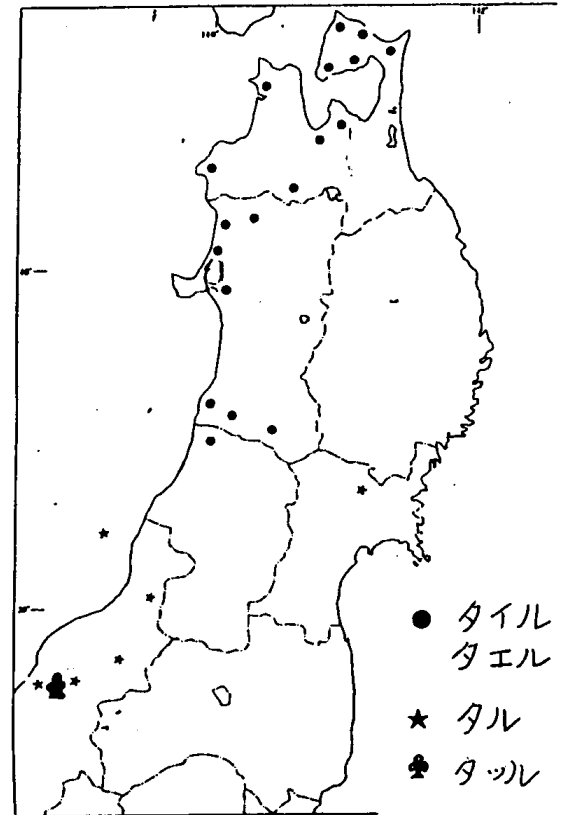


図2 「足りる」



方言ごとにまとめたものである。

これから「/r/脱落」・「/r/行拍の/Q/化」は、例外なく、基本形において /r/ 行拍が連続する語の /ri/ または /re/ に対応する拍にみられることが見出せる。以下、この点に注目しながら、考察をすすめる。なお、「/r/行拍回避が、/ri/・/re/の拍にのみ生ずるのは、/r/の調音点と /i/・/e/ 調音時の舌尖位置の接近度が高いためと考えられる。

1・1. 「/r/脱落」

「/r/脱落」について、此島正年（1968）は、学校文法の枠組みによる活用論に立ち、/naɒa'eru/（流れる）を、「/naɒa/（語幹）+/'eru/（活用語尾）」と捉え、活用語尾に生ずる現象としている。しかし、各方言に即した活用分析をすれば、「/naɒa'e/（不変化部分＝語幹）+ /ru/（活用語尾）」となり、「/r/脱落」は語幹に生じていることが分かる。

東北・越後方言における /r/ をめぐる音変化

/r/ 脱落・/r/ 行拍の/Q/化の方言差・資料差

語	【弘前語彙】	【青森の方言】	青森方言	八戸方言	秋田方言	三条方言	安代方言	久慈方言	一関方言	仙台方言
られる	●ラエル	●ラエル	●ra' eru	●ra' eru	●ra' eru	♣ raQru	●ra' eru	●ra' eru	●ra' eru	○ rareru
れる	●エル	●エル	●' eru	●' eru	●' eru	♣ Qru	●' eru	●' eru	●' eru	○ reru
呉れる	●エル				●keru	♣ kuQru	●keru	●keru	○kureru	
呉れた							●keda	●keda	●keru	
流れる	●ナガエル	●ナガエル					●na g a' eru	○ na g a' eru	○ na g a' eru	
生れる	○マレル						●ma' eru	○ Nimareru	○ Nimareru	
忘れる	●フスエル						○' wasureru			
忘れた					●wasi' eda					
折れる	○オチヨレル						○' oreru	○' osoreru	○' oreru	
切れる		●キエル				♣ 'oQru				
枯れる		●カエル				♣ kiQru				
腫れる						♣ kaQru	○ kareru	○ kareru	○ kareru	
濡れる		●スエル					○ kareru	○ kareru	○ hareru	
濡れた							○ nureru	○ nureru	○ nureda	
借りる							○ nureda	○ nureda	○ nureda	
借りて(た)							○ karuru	○ kaniru	○ kaniru	
降りる							○ karuda	○ kanida	○ kanida	
降りる										
足りる										
足りない										
わかれる	●ワガエル									
割れる										
汚れる										
取れた										
おくれる	●オグレル									
こなれる	●コナエル									
爛れる	●タダエル									
ほぐれる	●ヤヅエル									
やつれる	●シカエル									
叱られる	●シカエル									
離れる	●ハナエル									
										○ hanareru

【凡例】 ●；/r/ 脱落 ♣；/r/ 行拍の/Q/化 ○；/r/ に変化なし

【注】 三条方言における () は、具体例は示されていないが、記述により推定される場合であることを示す。

音韻現象がみられるのが語幹であるか活用語尾であるかという認定の問題は、語幹統一の類推が働くか否かという点で極めて重要である（齋藤孝滋2001a,b, 2002a,b, 近刊予定 ab）。

そこで、ここでは、この「/r/脱落」を、例外なく、基本形において /r/ 行拍が連続する語の語幹部の /ri/ または /re/ に対応する拍にみられるという事実に注目して論を進めることとする。

まず、仙台方言を除く各方言で /r/ 脱落が一般的にみられる「れる・られる」の場合について検討する。

特に、/ra' eru/ が、他の語 /na o a' eru/（流れる）等の「V語幹動詞（母音語幹動詞＝所謂一段活用動詞）」と異なる点は、/r/ 行拍が本来2連続ではなく3連続であった点である。また /ra' eru/ と異形態の関係にある /' eru/ の場合も、語レベルでは /r/ 行拍は2連続であったが、（文節のレベルで捉えると）語幹末尾が /r/ のC語幹動詞（子音語幹動詞＝所謂四段動詞）に接続する場合、/tora' eru/（取られる）のように、/r/ 行拍が3連続であったわけである。/r/ 脱落は、歴史的にみるならば、まず第1段階として、/r/ 行拍が3連続である /ra' eru/ において発生し、第2段階として /' eru/ が語幹末尾が /r/ のC語幹動詞（例 /toru/ 取る）に接続した場合（/tora' eru/）、その後、第3段階として、語幹末尾が /r/ 以外のC語幹動詞（例 /' jomu/ 読む等）に接続した場合に及んだものと考えられよう。

ここに「/r/脱落」の発生原理として、一種の重音省略（haplology）「/r/行拍連続回避」が見出せるのである。

さて、以上は基本形（所謂終止形）においての場合であった。次に、否定形（所謂未然形）タ形（所謂連用形）の場合について述べる。/ra' eru/ の「/r/行拍連続」は、否定形においては、/' o g ira' en ε(ε)/（起きられない）、タ形においては、/' o g ira' eda/（起きられた）と2連続である。一方 /' eru/ の場合は、語幹末尾が /r/ 以外のC語幹動詞に接続するとき、否定形において、/' joma' en ε(ε)/（読まれない）、タ形において /' joma' eda/（読まれた）のように「/r/行拍」は連続しなかったのである。にも関わらず /' eru/ には「/r/脱落」が生じているのである。

東北・越後方言における /r/ をめぐる音変化

この場合、次に挙げる3種類の類推が作用していると考えられる。

(a) 基本形等の /r/ 行拍2連続が見られる活用形からの類推

*'jomareru : 'joma' eru = 'jomareda : X

X = 'joma' eda

(b) 語幹末尾が /r/ のC語幹動詞に接続する場合の /'eru/ からの類推

tora' eru : tora' eda = 'joma' eru : X

X = 'joma' eda

(c) すべての活用形において /r/ 行拍連続がみられる異形態 /ra' eru/

(<*/rareru/) からの共通部分 /(-)'eru/ 統一の類推

ra' eru : ra' eda = 'eru : X

X = 'eda

さて、/'eru/ は、/r/ 行拍連続が、本来基本形の場合2連続で、否定形・タ形の場合はみられなかったが、それと音的事実が同様であるのが「流れる・生まれる」等のV語幹動詞であり、青森、八戸、秋田、安代方言では、/na ɔ a' e ru/ (流れる)、/ma' eru/ (生まれる) のように、/r/ 脱落が進行しているのである。

例えば、/na ɔ a' ru/ (流れる) は否定形やタ形の場合は、本来 /r/ 行拍が連続しなかったにも関わらずそれぞれ /na ɔ a' e n e / (流れない)、/na ɔ a' e da/ (流れた) のように「/r/ 脱落」がみられる。即ち、これらの場合は純粋な音韻レベルでは、解釈不能である。

「/r/ 脱落」は、まず、基本形等の「/r/ 行拍の連続」が2連続となる活用形に生じたと考えられる。「/r/ 脱落」はこの段階では音韻レベルの現象であったといえよう。そして、その後、以下に示したような「基本形等の /r/ 行拍2連続がみられる活用形からの類推」により、否定形・タ形等の /r/ 行拍が連続しない活用形にまで「/r/ 脱落」が生ずるに至り、「/r/ 脱落」の音韻規則性は崩される結果となるのである。

(a) 基本形等の /r/ 行拍2連続が見られる活用形からの類推

*na ɔ areru : na ɔ a' eru = *na ɔ areda : X

X = na ɔ a' eda

ところで、/r/ 脱落は、どうしてその他の語類には見出せないのか。

それは、「/ri/ + /r/ 行拍」の音構造を持った日常語自体がV語幹動詞、助動詞「れる・られる」以外にはオノマトペを除いて見出し難いという事情によるためと考えられる⁽⁵⁾。

1・2. 「/r/ 拍の /Q/ 化」

ここで扱う「/r/ 拍の /Q/ 化」は、新潟県三条市郊外の栄方言のV語幹動詞およびV語幹動詞型助動詞「れる・られる」語幹部分に生ずるものである。従って、生ずる環境としては、1で述べた「/r/ の脱落」と同様であるといえる。資料は表1を参照されたい。

これら以外にも、「自分のよく知っていることをていねいに伝える」場合に用いる終助詞 /re/ が接続した場合に動詞語尾に /Q/ 化がみられる例がある⁽⁶⁾。

ciQtoba ka maci mare ' eQte ku Qre

ちょっとばかり 町へ 行ってきますよ

従って、本現象も、/r/ 行拍連続の回避によるものと考えられる。先に述べた「/r/ 脱落」が「r 行拍」の子音部分を脱落させることにより、/r/ 行拍連続の回避をおこなったのに対して、三条方言の場合は、/r/ 行拍の母音部分を脱落させ、/r/ 行拍を /Q/ 化させることによって、その回避をおこなったものといえる。

V語幹動詞およびV語幹動詞型助動詞「れる・られる」の他に、「/r/ 行拍の /Q/ 化」の例が認められない理由は、「/r/ 脱落」の場合と同様に、「/ri/ + /r/ 行拍」の音構造を持った日常語がV語幹動詞、助動詞「れる・られる」以外には見出し難いという事情によるためと考えられる。

さて、以上は、基本形における場合であったが、次に、否定形・タ形等における場合について述べる。

「借りる」を例として挙げると、否定形、中止形、音便形は、それぞれ /kareN/ (借りない <借りん>), /kare/ (借り), /kareta/ (借りた) である。

「/r/ 行拍の /Q/ 化」は、「/r/ 脱落」と異なり、否定形・タ形においてはみられない点で興味深い。「/r/ 行拍連続の回避」という共通の要因によって生じたと考えられる「/r/ 脱落」の場合は語幹の統一が生じたのに、三条方言における「/Q/ 化」の場合は、それが生じなかったのである。

東北・越後方言における /r/ をめぐる音変化

以下に、「/r/ 行拍の /Q/ 化」が否定形、中止形、タ形において生じない理由を検討する。

否定形については、/Q/ と /N/ が連続する (*kaQN/ となる) ことを避けるために「/Q/ 化」が拒まれたと考えられる。/Q/ と /N/ が連続するという音配列は当方言には存在しない。

中止形については、仮に「/r/ 行拍の /Q/ 化」が生じた場合、/Q/ で発話が休止することになってしまう（例えば「借り」ならば *kaQ/ となってしまう）。当方言においては、/Q/ は語末（或いは発話末）に位置しないため、「/r/ 行拍の /Q/ 化」は、生じ得なかったものと考えられる。

タ形については、次のような事情が考えられる。

基本形等の活用形において「/r/ 行拍の /Q/ 化」が生ずる V 語幹動詞には、所謂自動詞が多い。仮に、語幹統一によってタ形において「/r/ 行拍の /Q/ 化」が生じた場合、以下に示すように、その対応する他動詞と同音衝突を起こしてしまうことになるのである。

自動詞 (V 語幹動詞) 実際	'oreta 折れた	kireta 切れた	'wareta 割れた
〃 仮に「/Q/ 化が生じた場合	('oQta)	(kiQta)	('waQta)
対応する他動詞 (C 語幹動詞)	'oQta 折った	kiQta 切った	'waQta 割った

日常の言語生活のなかで使用頻度が非常に高いタ形において、自動詞と他動詞が衝突することは、コミュニケーションの際に大きな支障となることが考えられる。

以上のような音韻的及び語彙的事情が、語幹を統一しようとする力に打ち勝ったために、/Q/ 化は「/r/ 行拍が連続しない」活用形にまでは進行せず、そのことがかえって「/r/ 行拍の /Q/ 化」の音韻規則性を保たせる結果となったものと考えられよう。

なお、北奥羽方言の場合については、/r/ 脱落によって */kareda/ が /ka'eda/ (食われた) となっても、さらに進んで /kεεda/ とまではならない。一方、「替えた」は、共通語の連母音 /a'e/ に /εε/ が対応するため、/kεεda/ となっており両者が衝突することはない。

2. 「/d/ の /r/ 化」

「/d/ の /r/ 化」は、先に述べた2つの現象と異なり「/r/ 行拍連続」を増加させる現象である。

これは、語頭及び語中の /N/ の直後以外の環境における共通語の /d/ に /r/ が規則的に対応する現象であり、三条方言にみられる⁽⁷⁾。

/koromo/ (子供) /sore/ (袖) /s ɔ ɔ ra/ (そうだ) /zir ɔ ɔ sja/ (自動車)

三条方言においては、/r/ 拍が連続する場合、一方 (/i//e/ の直前) の /r/ 拍を /Q/ 化させることにより、「/r/ 拍連続回避」を果たしていた(例 /kaQru/ 借りる)。

それでは、「/d/ の /r/ 化」によって、新たに「/r/ 拍連続」が生ずるような場合はどうであろうか。例えば「撫でる」、「茹でる」の場合である。

加藤氏によると、これらは /nareru// 'jureru/ または /naQru// 'juQru/ のようにはならず、それぞれ /nazeru/, / 'juzeru/ となるとのことである⁽⁸⁾。

これより、「/d/ の /r/ 化」は、「/r/ 拍の /Q/ 化」が規則化したあとに生じたことが窺え、/z/ 拍へ変化することにより、本来の /r/ 拍を有する語(例えば、/naQru/ 慣れる、/ 'juQru/ 揺れる)との衝突をさけつつ、「/r/ 拍連続回避」を果たしたものと解釈できよう。

3. まとめ

本研究によって得られた知見をまとめると次のようである。②と類推(a)は、井上(1981a, b)が、庄内方言を対象として見出しているが、他の①、③~⑱(類推(b)(c)含む)は、本研究による新知見である。

- ① 「/r/ 脱落」は、活用語尾ではなく、語幹に生ずる現象である。
- ② 「/r/ 脱落」は、主として音韻レベルの現象「/r/ 行拍連続回避」(一種の重音省略 haplology)により生じた現象である。
- ③ 「/r/ 脱落」は、第1段階として、/r/ 行拍が基本形・条件形等で3連続 /ra'ere/・/ra'ere/ (<*rareru/・*/rarere/), 否定形・タ形等でも2連続 /ra'enε(ε)/・/ra'eda/ (<*rarenε(ε)・*rareda/)する /ra'eru/ に発生したと推定される。また、同様に、語幹末尾が /r/ のC語幹動詞に接続する際、文節レベルでみると、/r/ 行拍が基本形・条件形で3連続 (/tora'eru/・/tora'ere/ <(*torareru/・*/torarere/

東北・越後方言における /r/ をめぐる音変化

「取られる・取られれ」), 否定形・タ形で2連続 (/tora'en ε(ε)/・/tora'eda/
「取られない・取られた」) で生じたと推定される。

- ④「/r/脱落」は、第2段階として、語幹末尾が /r/ 以外のC語幹動詞に接続する際、/r/行拍が基本形・条件形等で2連続 (/joma'eru/・/joma'ere/
(<*/jomareru/・*/jomareru/「読まれる・読まれ」) するものの、否定形・
タ形で連続しない /joma'en ε(ε)/・/joma'eda/(<*/jomaren ε(ε)/・/jomareda/
/eru/に及んだものと推定される。
- ⑤④の「/r/行拍が連続しない否定形・タ形」においては、(a) 基本形等の /r/
行拍2連続がみられる活用形からの類推、(b) 語幹末尾が /r/ のC語幹動詞に
接続する場合の /eru/ からの類推、(c) すべての活用形において /r/ 行拍連続
がみられる異形態 /ra'eru/ (<*/rareru/) からの共通部分 /(-)eru/ 統一の類
推、以上3種の類推が働いたものと推定される。
- ⑥「/r/脱落」の第1段階と第2段階の進行序列は、現存する方言資料からは、
今のところ見出せず、「比較」と「類推」という比較方言学的分析により理論
的に導き出されたものである。
- ⑦「/r/脱落」は、第3段階として、/r/行拍が基本形・条件形等で2連続
(na₀a'eru/・na₀a're/ (<*/na₀areru/・*/na₀areru/「流れる・流れれ」)
するものの、否定形・タ形で連続しない /na₀a'ene(ε)/・/na₀'a'eda/
(<*/na₀arene(ε)/・/na₀areda/) 音構造を持つV語幹動詞に及んだものと推定
される。
- ⑧⑦の「/r/行拍が連続しない否定形・タ形」においては、(a) 基本形等の /r/
行拍2連続がみられる活用形(基本形・条件形)からの類推が働いたものと
推定される。
- ⑨「/r/脱落」の第2段階と第3段階の進行序列の存在は、現存する方言資料か
ら明白であるが、その序列は、第2段階が3種類の類推(a)(b)(c)が作用し
たのに対し、第3段階は1種類の類推(a)しか作用しなかったために生じた
と推定される。なお、類推(b)と(c)の類推の影響力については、今のところ
不明である。
- ⑩三条市栄方言にみられる「/r/行拍の/Q/化」は、「/r/脱落」と同様に「/r/行

拍連続回避」により生じた現象である。

- ⑪ 「/r/ 行拍の /Q/ 化」は、「/r/ 脱落」と異なり、基本形にはみとめられるが、否定形・タ形にはみられない。
- ⑫ 「/r/ 行拍の /Q/ 化」が、否定形でみられないのは、/QN/ という音素配列が回避されたためであると推定される。
- ⑬ 「/r/ 行拍の /Q/ 化」が、中止形でみられないのは、本方言に存在しない発話末の /Q/ を回避したためであると推定される。
- ⑭ 「/r/ 行拍の /Q/ 化」が、タ形でみられないのは、V 語幹動詞には自動詞が多く、「/r/ 行拍の /Q/ 化」が生ずることにより発生する、「対応する他動詞との同音衝突」を回避したためと推定される。
- ⑮ 三条市栄方言には、規則的現象として「/d/ の /r/ 化」(/koromo/<*kodomo/ 「子供」) がみられるが、「/r/ 行拍連続」の可能性が生ずる場合は、例外的に「/d/ の /z/ 化」(/nazeru/<*/naderu/> × /nareru/ 「撫でる」) が生じ、あくまで「/r/ 行拍連続」は回避される。
- ⑯ 「/d/ の /z/ 化」は、「/d/ の /r/ 化」で「/r/ 行拍連続」が生じた場合発生する「/r/ 行拍の /Q/ 化」を回避する手段であると推定される。「/r/ 行拍の /Q/ 化」は、本来の /r/ 行拍を有する語群 (/naQru/>*nareru/ 慣れる) との同音衝突を生じさせることとなる。「/d/ の /z/ 化」はこの同音衝突を回避する目的でとられた手段であるといえるのである。
- ⑰ 東北方言にみられる「/r/ 脱落」と越後方言である三条市栄方言にみられる「/r/ 行拍の /Q/ 化」は、「/r/ 行拍連続回避」により発生した点で共通する。しかし、現象が進行して行く中で、前者は、形態レベルでの数種類の類推が作用し、音韻法則としての純粋性が保たれなくなったのに対し、後者は、音韻法則としての純粋性が保たれている点で異なる。
- ⑱ 「/r/ 行拍回避」が /ri/・/re/ のみに生ずるのは、/r/ の (舌先による) 調音点と /i/・/e/ 調音時の舌先位置の接近度が高いためと考えられる。

注

(1) 「/r/ 脱落」に関する先行研究としては他に此島正年 (1968) 122頁がある。

「/r/ 行拍の /Q/ 化」に関する資料としては、加藤正信 (1961) がある。

ところで、/r/ 行拍に関わる現象には、これらの他に、青森・八戸・安代方言などにみられる「中央語の語幹末尾子音が /' (w) / である子音語幹動詞の語幹末尾子音に /r/ が対応する」(/' udaru/ 歌う) 所謂ワ行四段動詞のラ行化現象、一関・仙台方言にみられる母音無声化によって生じたと考えられる /Qsjoo/ (拾う), /' uQsjo/ (後) などの現象 (これについては齋藤孝滋 (1992b) で既に述べた) があるが、生ずる音環境の関係から、いずれも本稿で扱う現象とは影響関係が見出せないことから、扱わない。

また、代名詞に関して、例えば「あれ・それ」が安代方言で /a' e/, /so' e/ のようになる現象がある。この代名詞における /r/ 脱落は、東北方言だけでなく兵庫・佐賀・長崎・鹿児島などにもみられ (平山輝男他編 1992) における「あれ【彼】より」、本稿で扱う「/r/ 脱落」とは性質の異なるものと思われるので、ここでは扱わない。

(2) 図1「借りる」、図2「足りる」は、それぞれ国立国語研究所 (1967) 第71図、同 (1991) 第63図に (それらにみられなかった新潟県三条方言の語形を加藤 (1961) によって加えることに) よって、筆者が作図したものである。

但し、これらの項目には所謂一段活用 (「借リル」・「足リル」) と五 (四) 段活用「借ル」・「足ル」(図1・図2において★の記号で表した語形) の分布の問題が関わってくるので、理想的には「降りる」のようなこの問題に関わらないと思われる語による分布の提示が望まれるところである。しかし、「そのような語の分布図が今のところ存在しないこと」、 「/r/ 脱落」分布を概観するという目的はほぼ達成されることが考えられることから、ここでは「借りる」「足りる」の分布図を示した。

同様の音環境にあるものとして「呉れる」があげられるが、国立国語研究所 (1967) 第74図によると「/r/ 脱落」によって生じたと考えられる語形 (/keru/ 等) が、宮城・山形以北の東北地方全域の他に、三浦半島、伊豆、さらには八丈島に点在し、分布のパターンが特殊である。従って、史的過程で何らかの特殊な事情に関わった可能性があると考えられることから、ここでは扱わない。

(3) 本稿で用いた各方言の記述資料は次の通りである。

安代 (荒屋新町)・久慈 (本町)・一関方言 (舞川) : 筆者の臨地調査 (1984~1985) による。なお、この資料を用いた各方言の概説は齋藤孝滋 (2001c) としてまとめている。

informant は、次の方々である。安代 ; T・S 氏, 1907生, 男性。久慈 ; Y・N 氏, 1920生, 男性。

一関 ; J・Y 氏, 1932生, 男性。K・Y 氏, 1918生, 男性。なお、一関方言については、齋藤孝滋 (1992a) の中に、「/r/ 脱落」の語例が示されている。

青森・弘前・秋田方言 ; 平山輝男編 (1982)。三条 (栄) 方言 ; 加藤正信 (1961)。仙台方言 ; 佐藤忠雄 (1981)。

いずれの資料も、その土地生え抜きの老年層を中心とした informant の方言共同体内

東北・越後方言における /r/ をめぐる音変化

で運用される言語体系を記述したものと見える。

- (4) 筆者が今日まで臨地調査・或いは文献調査した中で、最も /r/ 脱落の具体的語例が見出したのは松本明 (1954) であった。同書は、「(前略) ここでは弘前市 (青森県) に於いて話されている言語のうち、標準語と異なるすべての言葉を蒐集記載したのであります。(中略) 即ち訛語——標準語と同系であります、これと相違点を有するもの——土語——と標準語と全く別系でこれと関係がないもの——とを出来るだけ多数蒐集し、これを五十音順に配列記載したのであります。ただし、訛音に於いては単にアクセントだけの異なるもの及び濁音だけの変化のものはこれを採録しませんでした」(凡例より) とあることから窺えるように、濁音化以外に関しては共通語と同系であっても網羅的に採録しようとしている点でユニークであり、採録語数は4099語に及ぶ。従って、方言語彙集としては珍しく、音韻現象についてもある程度の傾向が把握でき得る性質のものと考えられよう。しかし、活用における実態は「語彙集」であるという性質上、十分には把握することはできない。

本書は謄写版刷で、調査には限定47部中の第27番 (東北大学図書館蔵) を用いた。

- (5) 北原保雄編 (1990) によって、語彙に「/ ^{ri} / + /r/ 拍」の音構造を持つ語をすべてピック・アップしたところ、外来語 (「ゴリラ」等)・オノマトペ (「きりり」) 等以外には、代名詞「かれら」、「われら」の2語のみであった。なお、代名詞の扱いについては注1を参照されたい。
- (6) 加藤正信 (1961) の例文24。__部の ku Qre は本来、kurure である。
- (7) 加藤 (1961)。
- (8) 加藤氏から直接伺った。

文献

- 井上史雄 1981a 「庄内方言の r 脱落にみられる形態変化の近代史」『東京外国語大学論集』31 (井上2000に再録)
- 同 1981b 「言語変化の伝播過程—庄内方言の動詞における r 脱落—」『藤原與一先生古希記念論集 方言学叢書 I—方言学の推進—』三省堂 (井上2000に再録)
- 同 2000 『東北方言の変遷』秋山書店
- 加藤正信 1961 「三方言の実態と共通語化の問題点 11 新潟」東條操監修, 遠藤嘉基, 平山輝男, 大久保忠利, 柴田武編『方言学講座代二巻 東部方言』東京堂
- 北原保雄編 1990 『日本語逆引き辞典』大修館書店
- 国立国語研究所 1967 『日本言語地図2』大蔵省印刷局
- 同 1991 『方言文法地図2』大蔵省印刷局
- 此島正年 1968 『青森県の方言』津軽書房
- 齋藤孝滋 1992a 「岩手県一関市舞川方言の音韻」『日本文化研究所研究報告』別巻29
- 同 1992b 「母音無声化の「広さ」と「強さ」—岩手方言を中心に—」『国語学研究』31
- 同 2000 「岩手県方言における母音無声化の変容」『国語学会平成12年度春季大会要旨

東北・越後方言における /r/ をめぐる音変化

集』

- 同 2001a 「岩手県一関市方言における形容詞活用体系」『フェリス女学院大学文学部紀要』36
- 同 2001b 「岩手県久慈市方言における形容詞の活用体系」『都大論究』38
- 同 2001c 『日本のことばシリーズ3 岩手県のことば』（平山輝男他編）明治書院
- 同 2001d 「岩手県久慈市方言の音韻」『日本文化研究』2（中華人民共和国大連外国語学院）
- 同 2002a 「音声研究の歴史」飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座3 発音』明治書院
- 同 2002b 「岩手県盛岡市方言の形容詞活用体系」佐藤喜代治編『国語論究9 現代の位相』明治書院
- 同 （近刊予定 a）「岩手県安代町荒屋新町方言における形容詞活用体系」『言語と人間』5
- 同 （近刊予定 b）「方言の音韻」北原保雄監修，江端義夫編『朝倉日本語講座 方言』朝倉書店

佐藤忠雄 1981『仙台方言攷—音韻と語法—』溪聲出版

平山輝男編 1982『北奥方言基礎語彙の総合的研究』桜楓社

平山輝男・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫 1992『現代日本語方言大辞典』明治書院

松本 明 1954『弘前語彙』謄写版

【付記】

本研究は、日本学術振興会平成12年度・13年度科学研究補助金奨励研究（A）「全国方言における主要音現象規則の計量的，構造的・社会的・地理言語学的研究」（代表：齋藤孝滋，課題番号12710229）による成果の一部である。

フェリス女学院大学文学部・大学院文学研究科助教授